

主張

自己決定と生徒の成長

横山 誠之



コロナ禍を受けてお盆や年末年始の際には、出歩くのを控える他、離れた実家への帰省を控えるよう呼びかけがありました。家族への感染リスクから帰省しないという選択をした方も多いと思いますし、家庭内の事情から帰省することを選択をされた方もいると思います。感染防止の観点からだけ見れば、正しい・正しくないということはあるのかもしれませんが、どちらも家族に対する思いやりをもって悩まれた上での選択だったと思います。新型コロナウイルスは、このような自分の生き方を問うかのような「自己決定」を迫る場面をもたらしました。

一方、学校では令和二年度は一年中感染防止を最優先した教育活動を行うこととなり、学校としてどのように判断するか、が常に求められる状況でした。学校教育に対する影響は大きなものであったと感じています。その時の状況に対し、学校としての判断が常に求められることは、校長としては苦しいことです。しかし、このコロナ対応により教育活動をどう進めるかを判断するため、その教育活動のねらいは何か、本質は何か、ということを考え直す必要があり、令和二年度は学校における各教育活動の「意義」を見直す活動を行ってきた、とも言えるのではないのでしょうか。



我々が教育活動を運営する上で、一番に目指さなければならないのは、「生徒の成長」です。安全であることはその前提条件です。安全・安心な環境の中で「生徒の成長」を目指す。このことはこれまでも、そしてこれからも変わりません。生徒の成長を目指すとき、乗り越えなければならぬハードルは必ず必要です。できなかったことをできるようにするというのが人間社会の中で非常に重要な「教育」という仕事に携わっている我々にとって、コロナ対応もまた生徒を成長させるための一つのハードルにできないものか、と考えます。

令和三年度に全面実施となる新学習指導要領の「前文」に次のような一文があります。
これからの学校には、…、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。…

一人一人の生徒にこのような力を身に付けさせるためには、生徒が課題に対し自ら考え、周りと協働し、生活や環境の向上に結び付けていくための行動を選択し、「自己決定」する経験が重要であると思います。現在は「コロナ禍において教育活動をどう進めるか」という大きな課題が突きつけられています。教育課程編成上は、教職員中心に対応を考えるのは当然のことです。しかし、そのこととは別に「生徒の成長のために」ということを考えたとき、この大きな課題に対し今後は生徒とも共に考えていくことが、教職員と生徒が共に納得できる、共に喜び合える、共に成長できる教育活動につながるのではないかと考えます。コロナ禍で「できないこと」ばかりが続く中、模索しながらも自らの行動を「自己決定」していく経験もまた、生徒に「生きる力」を身に付けさせるなど「生徒の成長」につながるものと私は考えています。

(全日中副会長・青森市立筒井中学校長)